

京都女子大学吉澤文庫所蔵『矢背日記』影印と翻刻

——『吉澤文庫善本解題目録』補録——

中 前 正 志
梶 山 柚 輝

ちょうど一年前の令和七年三月、京都女子大学国文学科編『吉澤文庫善本解題目録』が、本学図書館より刊行された。本年一月に刊行の『女子大國文』第百七十八号には同目録刊行記念の小特集が組まれているが、それと同様の意味を込めつつ、同目録にて分担執筆したうち、「他に伝本の知られない作品」「小規模のものではあるが、様々な方向からの興味をかき立てられる、愛すべき作品」と、同目録の解題に記した『矢背日記』（請求記号 YW914/Y 資料 I D J1200530）について、全体の影印とともに翻刻を掲載する。解題として右目録に記述したことの概要は、およそ次の通りである。

61 仮綴写本一冊。本文共紙の表紙（縦二五・〇×横一七・二糎）に、外題「矢背日記」（表紙中央に打付書）。内題ナシ。墨付十六丁、遊紙ナシ。外題の右に「延享二丑とし夏」。ある人物が、延享二年（一七四五）の四月二十六日から五月五日まで、「僕」を伴い、矢背（八瀬）の竈風呂（『史料 京都の歴史』第八卷所引『京都御役所向大概覚書』二正徳五

年に載る「洛中洛外湯屋敷・風呂屋敷并御定書之事」は、正徳五年時点で八瀬に竈風呂が十六軒あったと記録）にて湯治した際のことを、計十二首の和歌（今回、翻刻の方に和歌番号1〜12を加えた）を交えて綴った日記である。書きとめられた内容は、高野川上流（八瀬川）近くに位置する宿の主から、八瀬童子について、あるいは十年ほど前の宿の火事について聞いたこと（3ウ〜4ウ）、八瀬天神に詣でて自らが筆を執った絵馬を見たこと（5ウ〜6ウ）、三十余歳で病死した女が葬送されるのに遭遇したこと（9オ〜10ウ）、「産の神」（産土神）に御湯を奉獻する祭を見たこと（10ウ〜11ウ）、八瀬童子の菩提寺たる妙伝寺の様子を窺ったこと（11ウ〜12ウ）、元三大師の御忌日ということで五月三日に、人々が比叡山に参ると聞いて、僕に参らせたこと（14ウ）、などと多岐に亘っている。八瀬という特別な地の当時における民俗・風俗を知るうえで、一つの有効な史料ともなり得るだろうか。生憎の雨続きであったことを嘆く文言もしばしば見られる（1オ〜1ウ、7ウ〜9オ、11オ、12ウ〜14オ 和歌2・3・4・8、など）。後表紙見返しに見える奥書に記される通り、朱筆による添削が随所に認められる。添削したのは、奥書によるに、「猪苗代法橋」。享保三年（二七二八）に法橋に叙せられ、寛延三年（二七五〇）まで生き、「享保六年承家以来、至寛延三年、奉職匪懈」（『伊達世臣家譜』）であったという、猪苗代兼恵（綿拔豊昭『近世前期猪苗代家の研究』第十一章「猗々斎兼恵（兼竹）」参照、新典社、平成十年）が該当しようか。本日記の作者は、特定し得ていない。ただ、冒頭の一文に「殿の御ゆるされをうけて」とあることなどから見て、いずれかの公家に仕える者であったろうか。そうだとすれば、その公家とは、近衛家であった可能性が高いだろうか。近衛家は、猪苗代家と関係深かったことが知られている（右掲綿拔著書など）うえ、八瀬童子とも密接に関わっていて、八瀬の竈風呂を愛用していたという所伝もあり、そうした関係に因んで、昭和二十四年には八瀬の地に「近衛町」が生み出されてもいる（平山敏治郎「山城八瀬村赦免地一件（二）」〈『人文研究』二十四巻十号、昭和四十七年〉や宇野日出生『八瀬童子 歴史と文化』（思文閣出版、平成十九年）、『重要文化財指定

記念 八瀬童子―天皇と里人―（京都文化博物館、平成二十四年）参照。

右目録の解題には具体的に述べる事ができなかったが、朱書による添削は、

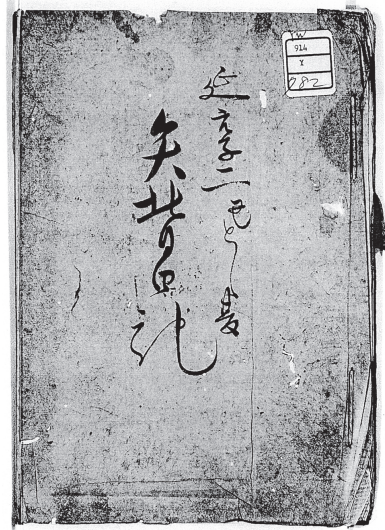
橋を引たり↓橋を取はなちたり（1ウL2）　　〜といへるに着ぬ↓〜といへるか舎りに着ぬ（2オL6）

山はふかみとりして、谷川の音はさえけり。↓山はふかみとりにて、谷川の音きよし。（3オL1〜2）

さらてたに↓さらぬたに（9ウL5）　　わか↓けに（14オL6）　　まさくしく↓つふくと（15ウL3）

といった、細かな字句を修正するもの、初歩的な表現上の不備を正すものが、ほとんどである。ただし、和歌については、かなり大きな修正を施しているものも見られる（和歌5とその直前の記述（10オL4〜11オL1）、和歌11）。また、「此所猶可考」とだけ記している場合も一箇所ある（13オL1）。

以下、半丁ごとの影印を、一頁に二葉ずつ掲げ、それぞれの下に対応する翻刻を掲げた。改行は元のまま、基本的に通行字体に改め、私に句読点を施した。判読し得なかった文字は、□とした。また、傍記された書込などは、多く朱書であるが、朱書でないものも見られる（既存のマイクロフィルムや紙焼写真では判別し難い）。3ウL3〜4、8オL6、9ウL4に見られる書込が、それである。また、9ウL5の「に」の左「ヒ」と右「て」も同じ。しかし、その「て」の下の「ぬ」は朱書。朱書のもののみが、猪苗代法橋による添削か（奥書に「悉その傍に朱書して」。和歌には和歌番号1〜12を付し、翻刻の該当箇所下方に日付を添えた。なお、奥書の翻刻に際しては、大谷俊太教授よりご教示頂いた。



延享二丑とし夏

矢背日記

けらふふらる事の有きは
 殿の御ゆるされをうけて、卯月末の
 六日、矢背の里の竈風呂におも
 むきぬ。きのふにも出へかりしを、此程
 雨降つ、きければ、をこたりぬ。けふも
 くもれる空なれば、人々と、めし

此ころ身にいたはる事の有ければ、
 殿の御ゆるされをうけて、卯月末の
 六日、矢背の里の竈風呂におも
 むきぬ。きのふにも出へかりしを、此程
 雨降つ、きければ、をこたりぬ。けふも
 くもれる空なれば、人々と、めし

鴨川の
 二條の橋
 三條の大路
 日影ほのめき山々の雲きり

や、立別れ、心も晴行やうに覚え、
 高野の川そひをのほれば、牛馬行
 つとひて、道のぬかりも猶さらにか
 かりけるにそ。ひたすら休らひつ、
 行に、未過るはかり、矢背の里土橋
 なる、こほし出雲といへる○に着ぬ。

かと、思ひ立けり。鴨川のみかさ
 まさりて、二條わたりも橋を引たりと
 つくる人の有ければ、三條の大路に
 行けるに、いつれの橋もさはる事
 なければ、爰まで下りけるは、いたつら
 ことに成ぬ。日影ほのめき山々の雲きり

や、立別れ、心も晴行やうに覚え、
 高野の川そひをのほれば、牛馬行
 つとひて、道のぬかりも猶さらにか
 かりけるにそ。ひたすら休らひつ、
 行に、未過るはかり、矢背の里土橋
 なる、こほし出雲といへる○に着ぬ。

きのふ一乗寺なる人のたよりに
 あないし置けるあるし其もふけ
 して待居けり。其さま、山家とも
 覚えぬはかり、かいつくろひたり。
 もたせつるわりこやうの物くいはて、
 僕をも休ませ、我も枕によりながら

きのふ、一乗寺なる人のたよりに
 あないし置ければ、あるし其もふけ
 して待居けり。其さま、山家とも
 覚えぬはかり、かいつくろひたり。
 もたせつるわりこやうの物くいはて、
 僕をも休ませ、我も枕によりながら

かうめをる山はふかみとりして、谷川の
 音はさえけり。向ひなる草の屋に、煙の
 かすかにたつさま、いふはかりなく静也。
 楽天のみつかから延年の術ありと
 いへるも、かゝる事なるへし。暮かゝる
 空に猿の一声さけひければ、

なかめをる。山はふかみとりして、谷川の
 音はさえけり。向ひなる草の屋に、煙の
 かすかにたつさま、いふはかりなく静也。
 楽天のみつかから延年の術ありと
 いへるも、かゝる事なるへし。暮かゝる
 空に猿の一声さけひければ、

なるゆへ水も不の若も此の
 紫^{さむらひ}の^{うら}ら^{うら}鳴^{うら}も
 風呂^{かまど}入^りを^し先^に心^を覚^え侍^る
 疎^そに^あね^まあ^しの^こほ^し出^てに
 ？の^物語^はい^はし^まの^まや^同あ^らわ
 矢背童子十三人といへる繪旨を

蒙^もる^事 後^ご醍^た醐^ごの^帝より
 當^あ今^いに^至る^まで、^御代^ごこ^とに
 か^はら^すと^いふ^ふ 十^とせ^はか^り前^まに
 此^こ家^けや^けう^せけ^るこ^のわ^ひし^さを
 い^ひて、^今又^か、^る家^けを^おの^れか
 ひ^とつ^力に^てな^しけ^りと^悦ひ^つ、

1 岩間ゆく水よりほかの音なきに

さひしさそへてましら鳴かも

○^{夜にありて}風呂^{かまど}に入るそ、先心よく覚え侍る。

夜^よにな^れは、^ある^しの^こほ^し出^て、^こし

か^たの^物語^はす。此^こ里^の事^を問^ける^に、

矢背童子十三人といへる繪旨を

蒙^もる^事 後^ご醍^た醐^ごの^帝より

當^あ今^いに^至る^まで、^御代^ごこ^とに

か^はら^すと^いふ^ふ 十^とせ^はか^り前^まに

此^こ家^けや^けう^せけ^るこ^のわ^ひし^さを

い^ひて、^今又^か、^る家^けを^おの^れか

ひ^とつ^力に^てな^しけ^りと^悦ひ^つ、

うせける親に見せはやの心絶す
 とて、漬おとす。誠や五十にして
 父母をしたふとは、かれかことなりとて、
 かんたんしてやます。けふはつかれぬ
 へし。はやく〇休打らへと、あるしのいひ
 ければ、亥の時はかりに伏す。

あつねを世をそく物死て、川色をみる
 手あらひ口すゝき、山色を見るに、
 霧もなく空晴ぬへく覚えしに、
 程もなくかきくもりて、雲きり立
 おほひ、小さめふりつゝ、山人のかよひ
 路もみえず。

山も川も見えわかぬまでかきくれて
 くもこそわたれ里の土はし
 昼のころ天神に詣てぬ。かみさひて
 いとたふとくぬかつき奉り、あたり
 なる絵馬ともをみけるに、左の方に
 哥仙の絵馬あり。ひはの湖西、上原

氏とかけり。よくもわかあゆみに似
 ける物かなと、目をとめて見るに、
 まかふへくもなきわか筆なり。いかなる
 人のいひよりて、かくつたなき筆をとり
 けるよと恥おもしくて、其人をおもひ
 つ、くれと、さらに思ひわかたす。江湖に

2山も川も見えわかぬまでかきくれて
 くもこそわたれ里の土はし

昼のころ、天神に詣てぬ。かみさひて
 いとたふとく、ぬかつき奉り、あたり
 なる絵馬ともをみけるに、左の方に
 哥仙の絵馬あり。ひはの湖西、上原

氏とかけり。よくもわかあゆみに似
 ける物かなと、目をとめて見るに、
 まかふへくもなきわか筆なり。いかなる
 人のいひよりて、かくつたなき筆をとり
 けるよと恥おもしくて、其人をおもひ
 つ、くれと、さらに思ひわかたす。江湖に

されをり 調 出であるーに酒
 す、めけり
 廿八日。けふも空かきくもり、ひねもす
 雨降つ、き、淋しさいはんかたなし
 わつかに携へきける唐のやまとの
 文なと見つ、日を送れり。郭公の

たよりよしと都にて聞しか、我には
 つれなくて、一声も音信さりけるこそ、
 恨みなれ。暮行まゝに、いと、村雲立
 おほひて、いつ晴んとも見えねは、
 むなしくかこちて、
 雲雨ふらぬ空にたなひけあつさ弓

さかななと調し出て、あるしに酒
 す、めけり。

廿八日。けふも空かきくもり、ひねもす
 雨降つ、き、淋しさいはんかたなし。
 わつかに携へきける唐のやまとの
 文なと見つ、日を送れり。郭公の

たよりよしと都にて聞しか、我には
 つれなくて、一声も音信さりけるこそ、
 恨みなれ。暮行まゝに、いと、村雲立
 おほひて、いつ晴んとも見えねは、
 むなしくかこちて、
 雲雨ふらぬ空にたなひけあつさ弓

矢背にかゝりしみねの村雲
 廿九日の雨打はきて、けふもふりぬ
 わひしく心地よからず。下人など
 天気あし、とて、つふやき腹立けり。
 4世を宇治の□れにはあらてあしる木や
 日をかさねてそ降まさりける

け夕、妻女のたらちねより、人して
 安否をとほる。雨つゝきて旅居わひし
 からんとて、看ともたひぬ。わか宿
 よりも文して酒なと送りければ、ひら
 きてつれくを慰むるに、向ひなる
 そはを、松ともとし、つれて来る

矢背にかゝりしみねの村雲

廿九日。よへの雨打つゝきて、けふもふりぬ。

わひしく心地よからず。下人など

天気あし、とて、つふやき腹立けり。

4世を宇治の□れにはあらてあしる木や

日をかさねてそ降まさりける

此夕、妻女のたらちねより、人して

安否をとほる。雨つゝきて旅居わひし

からんとて、看ともたひぬ。わか宿

よりも文して酒なと送りければ、ひら

きてつれくを慰むるに、向ひなる

そはを、松ともとし、つれて来る

その心なほあはれつゝもさきより
 いかなる人にもせけるそと尋ぬるに
 ちかきあたりの女、みそしあまりなるか、
 此程なやみゆ^てみまかりたる也といふ。
 さらにたに哀に心ほそき夕暮、
 いと、はかなく思ひとりて、かゝる

深山のおくまでも、無常のきそひ来る、
 さらにかはる事なし。けふまでわか
 命なからへありけるも、今いく程かいき
 のひてんやと、す^{なつた}へてあらぬ世を念し
 すく^しし^て
世にはたとちも行
 をぐる身もをくらす、身も山川の

ものをみれば、なきからを送る也けり。
 いかなる人のうせけるそと尋ぬるに、
 ちかきあたりの女、みそしあまりなるか、
 此程なやみゆ^てみまかりたる也といふ。
 さらにたに哀に心ほそき夕暮、
 いと、はかなく思ひとりて、かゝる

深山のおくまでも、無常のきそひ来る、
 さらにかはる事なし。けふまでわか
 命なからへありけるも、今いく程かいき
 のひてんやと、す^{なつた}へてあらぬ世を念し
 すく^しし^て
世にはたとちも行
 をぐる身もをくらす、身も山川の

あはれ此世に住○はてんかは
 けふはこちあしかりければ、はやくふしぬ
 今日(けふ)はさつきの朔日(しよくにち)、産(うぶ)の神(かみ)に御湯(ごとう)
 まいらする也(なり)とて、里人(さとびと)あまた立つとひ、
 いかめしくひしめきわたり、つねにかは
 りて、素襖(すそむす)など引つくるひて出立(いでだて)さま、

ひなひたれと古代(いにしへ)の心(こころ)はへみえけり。
 我(われ)も拜(まゐ)み奉(たご)らんとて詣(ゆ)て行(い)けり。御湯(ごとう)
 進(すす)らするさま、うやくし。雨(あめ)はいと
 はけしく、神前(かみまへ)のわたり、道(みち)のあしき
 こと、たとふるに物(もの)なし。は、かりもせて、
 狂哥(きやうか)のやうになんつゝり出(い)でける。

ちさる婦あめの御神の前なれば
 めくみそしるき玉垣のうち
 けしと時乃ち鼓の^お聞えければ、
 さに尋ねもとむるに、南の方なる
 山きはに、柴の戸をかまへ、草の庵を
 結ひて、妙伝寺といへる額をかけたなり

6 ちはやふるあめの御神の前なれば
 めくみそしるき玉垣のうち
 此ほど^も時の太鼓の^{折々}聞えければ、
 さに尋ねもとむるに、南の方なる
 山きはに、柴の戸をかまへ、草の庵を
 結ひて、妙伝寺といへる額をかけたなり。

内ひひとり僧居たり。一生不犯の
 沙門とみえて、三衣の破れたるをつく
 るはす、世塵をほらひて菩提心を
 求むる有様、あはれにも殊勝にも
 覚えて、
 7 雨雲の立まよふとも此寺に

内にひとりの僧居たり。一生不犯の
 沙門とみえて、三衣の破れたるをつく
 るはす、世塵をほらひて菩提心を
 求むる有様、あはれにも殊勝にも
 覚えて、
 7 雨雲の立まよふとも此寺に

すまはこゝろの月もみてまし
 けふはあるしの心さしの日也とて
 村のおのこあまたあつまり、我にも茶を
 送る。暮にいたりければ雨もやみて、
 宵のほと星もあまたみえければ、
 あすもやはれんと悦ひしに、子一つ

此所猶可考
 より雨の降こと、うつすか如く、雷公の
 声、水の音、風もはけしくなり
 とよみければ、いもねられす。
 二日の朝に至りて、猶しつまらず。水は、
 あなたの峯よりこなたまで、一つおもてに
 なりぬ。

雲路とち雨に雨そふ川きしに
 なを物すこき鳴神の音
 昼になれば、雷公もやみて空晴ぬ。
 日影のみえ初ければ、嬉しくて、
 9 よもき生ふる。ひはたの軒に雨晴て
 たえくのこるみねのしら雲

やつ過る頃より、又かきたれて降ければ、
 かきこもりてふしぬ。
 三日といふにそ、まことに日もてりか、やき、
 鳥の声までも花やかに、心も打はれけり。
 10 天つそら清くてらせる光りこそ
 わか日本といふへかりけれ

けふは元三大師の御忌日、ひえの山へ
 人あまた詣るよしを聞いて、僕を参ら
 せつ。我は天神の御社に詣て、それ
 より山上なる山王に詣す。さかしき坂
 六、七町も過て、本社あり。人のかよへる
 跡もなく、草しけれり。されとも、くまなき

日よりなれば、心もうきたつやうに覚え
 ぬ。かつき奉りて、
 11〇は社でけふ幸もこゝそに日よしとてこそ君守る
 光りのうちに我ももらすな
 日のくるゝまで、川のほとり、こなたかなた
 さまよひぬ。夜に入れれば、あるし出て、

過ぬれは、とくかへるへかりけれど、今
 一たびいらはやなど、風呂の余波
 なきにしもあらず。かつは主にと、
 められて、五日になりぬ。日記はつねに
 するなれば、身のならばしとなりて、
 かゝる跡なしことをも書付てそ

都のこと共物語す。子の刻はかりふし
 けるに、公私とりませて、つねの事とも
 まさしくしく夢にみたりければ、
 12旅ねする声のかり屋のかりまくら
 ゆめはかりこそ都なりけれ
 四日。けふは一まはりといふ日数も

帰る侍りける

帰り侍りける。

右矢背日記の草、猪苗代法橋
一覽せられ、添削あるへき
所々、かく箋しをきて
口つから示さるゝを、悉
その傍に朱書して

返呈候也。(花押)